茂木の散歩道

年代未詳　　北浦　白岩海岸

※　写真は、茂木植物化石層のある白岩海岸、この付近の海岸から恐竜の化石が出土している。

1 茂木の神社 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
2 合戦場 ・・ 27
3 唐船石 ・・ 27
4 大悲山徳三寺 ・・ 28
5 松原山田上寺 ・・ 29
6 準堤観音 ・・・ 29
7 唐八景 ・・ 30
8 稲荷神社 ・・・ 30
9 轟滝 ・・ 31
10 甑岩 ・・ 31
11 太田尾の大クス ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
12 丸尾神社 ・・・ 32
13 成尾地蔵尊 ・・・ 32
14 日吉神社 ・・・ 33
15 片峰の獅子舞(伝統芸能)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
16 大山祇神社 ・・・ 33
17 茂木植物化石層 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
18 伊都岐島神社(弁天社) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
19 石の御前(大山祇神社) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
20 裳着神社 ・・ 35
21 感応山円成寺 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
22 水神神社八大龍王水神祭(川祭り)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
23 ペーロンと龍王神社樽納め神事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
24 松尾山玉台寺 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
25 潮見﨑観音堂 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
26 竈神社 ・・ 39
27 山ン神(大山祇神社)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
28 加茂神社 ・・・ 40
29 草積御前 ・・・ 40
30 塩釜神社 ・・・ 41
31 千々の二つ岳 ・・ 41
32 千々弥生式土器の遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

１茂木の神社

旧茂木村７郷には、それぞれ異なる産土神が鎮座する。これら鎮守の神がいつ勧請されたかは不明であるが、16 世紀末期のキリシタン時代に破壊され、寛永 3(1626)年に当時の領主である島原藩主松倉豊後守重政が、日見村の天満宮、古賀村の八幡宮とともに復興した。また、重政は、元肥後飽田郡祇園社神主であった詫麻右近将監清永を茂木・日見・古賀の 3 ケ村の神主職とし、以降託麻氏が代々九社の神職を務めた。

茂木本郷…八武者大権現（現：裳着神社）
飯香浦…山王大権現（現：日吉神社）
木場（北浦）…大山祇神社
田上…稲荷社（現：稲荷神社）
宮摺…三宝荒神（現：竈神社）
大崎…加茂明神（現：加茂神社）
千々…塩竈神社

２合戦場

長崎名勝図絵によると「茂木村の街道、田上峠にある。高く平らにひらけて、遠望がきくので、昔ここを茂木口の要路として、番所を設け、警備の者を置き、物見をさせた。長崎氏の所領時代に、深堀方の密使を捕えたなどいうのは、ここである。故に合戦場といった。一説では、砲術の練習場であったから、火箭場といったのが訛ったともいう。どちらが本当か知らないが、あとの説は後世の人が作った話のように思われる。近年は春になると、凧揚げの場所となっている。」とある。明治以降、この地で盛んに競馬が催されたので田上競馬場とも称された。

東浜町の呉服商田中直三郎が日露戦争の戦勝を記念して公園を整備したとき、漢学者の西道仙が祝捷山と命名した。現在、祝捷山公園となっている。

３唐船石

田上の愛宕自動車学校の入口の交差点から祝捷山公園に通じる道路を 150mほど入ったところにある。

長崎名勝図絵には、「僧都岡の南、田上合戦場の近くにある。石の高さ五六尺、徑り六圍ばかり。形が唐船に似ているので、この名がある。傍に松が二三本生えている。永禄元(1558)年明の船が初めて入津した。大きな船で、財貨を沢山積んで来た。このことが京都に聞こえ、足利将軍義輝公は、小島備前守を遣わされた。備前守が余りに威張

長崎名勝図絵より

りちらすので、領主長崎氏は憤りを発し、或る夜備前守を襲って殺し、ここに葬った。この巨石を以って塚とし、松を持って標としたという。小島備前守は尾崎、即ち今の稲荷祠金剛院（現在の大崎神社）に居を構まえた。」とある。

４大悲山徳三寺

臨済宗妙心寺派の寺で、釈迦牟尼仏を本尊として、妙心寺開山無相大師法統を継承し、安心立命を得せしめんが為、杉山徳三郎が発起の上、許可を得て、平戸にある同派の雄香寺の一寺院「大梁院」を明治 28（1895）年に現在地（当時地番：西彼杵郡茂木町田上名合戦場 355 番地）に移し、徳三寺と改称した。当時筑後国の千徳寺住職であった金丸良渓和尚を第一世住職として迎えた。

開山良渓和尚は　筑前国水城村の戒壇院で禅僧の指導を行っていたと言われている。

開基杉山徳三郎は　長崎の地役人の家に生まれ、幕末の海軍伝習所で蒸気機関の技術を学び、筑豊の目尾（しゃかのお）炭坑で初めて蒸気機関による揚水を成功させた人物である。

ここには、以前、石動山観音寺があった、同寺について、長崎名勝図絵には、「田上村にある。臨済宗黄檗（おうばく）派の禅宗で、天州和尚の開基※とする。天州は隠元の法孫である。元禄年中（1688-1703）天草代官服部六左衛門が、長崎に近い所に、一寺を建立したいと天州に相談した。天州は茂木村がよかろうと答えた。その頃教存という真言僧が、ここに小堂を建てて、祈祷所としていた。天州はこれを譲り受けて再興し、石動山観音寺と称した。近年は頽廃している。本尊観世音像は唐作。他にも像があり、又、即非や雪广筆の額、聯がある。寺の右の方、石段を上がって石の小祠があり、開山天州の石の立像がある。鐘は〔銘文は略す〕元禄13（1700）年天州の時、安山彌兵衛が鋳造した。」とある。

去来句碑
「名月や　たかみにせまる　旅こゝろ」

また、楊柳泉について同書には、「観音寺の林中にある。島原城主高力左近将監が、雄浦に別業を持っていて、ここに来た時は必ずこの泉の水で茶を煮たが、味が秀れていた。名づけて楊柳泉という。」とある。同寺の旧境内を含めると、現在２本の井戸が残っているが、この楊柳泉かどうかはわからない。

同寺境内西方隅に田上尼の別亭の千歳亭（せんざいてい）があった。千歳亭について同書には「向井去来の営むところである。去来は京都から来往して、長崎ではここに住んだ。一説によると、齢百歳に近い老尼がいて、去来はこの老尼のために、これを建てたともいう。今その跡は判らない。」とある。向井去来（1651－1704）は、江戸時代前期の長崎生まれの俳人。芭蕉の弟子で、蕉門十哲の一人。京都嵯峨野の落柿舎に暮らしていた。

※　開基と開山

開基と開山は、寺院または宗派を創立するという意味では同義語であるが、開基には、寺院創建の際に経済面を負担する世俗の信者という意味で使われることがあり、この意味では、開山と対になる。

５松原山田上寺（でんじょうじ）

浄土宗鎮西派で本尊は阿弥陀如来。

文和 3(1354)年建道法師がこの地に来て光岳院皆行庵という草庵を結び修行していた。

その後は伝承がなく、明暦 3(1657)年島原城主高力摂津守忠房が、境内を寄附して田上寺を創立した。開山は、玉台寺 3 世住職の残岌上人である。島原藩から永続助力として毎年玄米 4 石を明治 4(1871)年の廃藩置県まで付与されていた。

残岌上人の関係から玉台寺預かりとなったが、天明 8(1788)年から大音寺預かりとなり明治 24(1891)年 4 月 15 日玉台寺の役僧大角真栄を招聘し、寺務を依頼していたが、明治 29(1896)年 4 月 16 日同氏を住職とし、同年 8 月 13 日玉台寺から独立した。

本堂には、徳川幕府第 2 代秀忠、第 4 代家綱各 1 基、第 5 代綱吉、第 6 代家宣、第 7 代家継、第 8 代吉宗以上 1 基、第 9 代家重、第 10 代家治以上 1 基の 4 基と高力摂津守忠房、第 3 代将軍徳川家光の甥の松平長七郎の位牌がある。

本堂前の供養塔

松平長七郎は、3 代将軍家光の弟で、不遇な最後を遂げた徳川忠長（駿河大納言）の子と言われ、島原の乱の際に幕府の討伐軍に加わりこの寺で没したという伝承があり、位牌と本堂前に供養塔と伝えられているものがある。

６準堤観音（じゅんていかんのん）

唐八景のバス停の横にあり、準堤観音由来記によると、「この観音堂には一基の古い墓石が安置されているが、その下に眠る人について次のような伝説がある。『今よりおよそ 800 年前、当地にて婦女の屍を発見したが、その人は巡礼姿で蓑をまとい、懐中に聖徳太子の真筆である観音経の一帖を所持していたので立会った者どもは、高貴の婦女に相違ないと思い、一同はかって丁重にここに埋葬し墓石を立てたという。このことを知った近隣の人々が参拝し、願い事をしたところ難病が治り、災害をまぬがれる者が続出し、その霊験をこうむる者は幾千人をこえたといわれ、ついに長崎人士をはじめ、遠近の多くの者が信仰するようになった。そのため人々は準堤観世音菩薩と称して崇め奉るようになった。』という。

また、一説によるとこの婦人は、僧俊寛の妻女であると言われている。俊寛が京都の鹿が谷で、平家を討つ計画を立てたとの理由で、平清盛によって長崎港外の伊王島に流されたが、最後まで許されず、ついにこの島で一生を終ったと伝えられ、墓石もあるところから、夫のあとを追ってこの地まで来たが、病にかかり死没したというものである。」

現在、毎年 4 月の 28・29 日に田上町連合自治会主催の祭礼が行われている。

僧俊寛の流罪地について、講談社の日本人名大辞典には、薩摩の鬼界（きかい）ケ島（硫黄島）と記され

ている。

７唐八景

標高 305mで、田上から弥生道路を登ったところにあり、眺望雄大で江戸後期の漢詩人かつ史家である頼山陽が長与村に上陸し、茂木港から天草に渡る途中、ここを通った際に中国の瀟湘八景になぞらえて唐八景と名づけたといわれている。

田上から唐八景に通じる道路は、当時旧茂木町内であるが、長崎市が観光公園とする計画を具体化し、田上から頂上まで約 2,320mの自動車道路を昭和 8 年 3 月に完成させている。弥生道路の名称は、昭和 8 年 3 月東伏見宮妃殿下が御巡視の際に命名された。

ここでは、4 月 28 日・29 日の準提観音の祭に「ハタ揚げ」が行われ、大正時代までは、この祭のときは芝居や覗機関※なども来て大変な賑わいを見せていた。現在も、4 月頃新聞社などの主催でハタ揚げ大会が行われている。

※　覗機関とは、箱の中に、物語の筋に応じた幾枚かの絵を入れておき、これを順次に転換させ、箱の前方の眼鏡を通して覗かせる装置。

島原半島方面

頂上付近の公園

長崎港から長崎市街地方面

８稲荷神社

田上名の氏神で、寛永 3(1626)年当時の領主である島原藩主松倉豊後守重政の時に勧請※された。創建当時は、田上名の西平にあったが、元禄 4(1691)年現在地に移された。

田上 1 丁目の茂木街道に面した場所にあり、倉稲魂命を祀り、京都の伏見稲荷大社系である。

毎年、10 月 15 日前後の日曜日に田上くんちが行われている。

※　勧請とは、分霊を他の神社に移して鎮祭すること。

９轟（とどろきのたき）　滝

小甑岩の北東に水源を発した川は水量も豊富で、重籠の南東で懸崖を流れ落ちている。

長崎名勝絵図に「衡鹿峰の東。川の源になっている。廣さは僅かに二三歩（にさんぶ）※1であるが、深さは底知れない。その上から水が湧いて、小瀑布（しょうばくふ）※2となってこの潭（ふち）に落ちている。高さは十数仞（じゅうすうじん）※3車のわだちのような音を立てて落ちるので轟潭というのである。神龍が潜んでいると言伝えられ、霊異が多い。旱魃には雨乞いをするが、幣帛（へいはく）※4を捧げて、長い竿で釣の眞似をすると、必ず雨が降るという。曽（か）って水練の者が二人、潭の底を探検しようと、十餘尋（じゅうあまりじん）※5も潜って上がってきたが、急性の疫病にかかって苦しみ、やっと治ったと思ったら、一人は聾（つんぼ）となり、一人は髪が抜けてしまった。又、元禄年中に常陸國の人が遊歴し、日が暮れたので、潭の側に野宿していると、夜中に急にあたりが昼のように明るくなり、木の葉や小石まで、はっきりと見えるので、最早夜も明けたかと、後を振り返って見れば、暗黒である。あとで村人に、自分は十二年もの永い間、昼となく夜となく、山川を周遊しているが、こんな不思議なことは初めてだ。と話したという。昔、潭の側に観音院という庵室があって、夜も更ける頃になると、怪異のことが多かった。美女が忽然と現れて、もの思いに沈んだように、一言も口をきかず、黙って座っているともいう。そのためか、誰も近づかなくなり、廃庵になって、今では礎石と石佛が遺るばかりである。」とある。

重籠から早坂間の道路の途中から、竹林の中の急勾配の小道を降りたところにある。

※1　歩とは、土地面積の単位で、1坪(3.3㎡)と同じ。
※2　瀑布とは、たきのこと。
※3　仞とは、中国古代の、高さや深さの単位で、諸説がある。
※4　幣帛とは、神社で、神前に奉献するものの総称。
※5　尋とは、長さの単位。両手を広げた長さ「ひろ」とも呼ぶ。

10甑岩（こしきいわ）

標高362m。山の上に、巨石が聳（そび）え、岩の中に甑岩神社が祀られている。甑岩神社の祭神は、日本武尊（やまとたけるのみこと）である。

甑岩神社から飯香浦方面

付近は公園となっており、田手原町から道路も整備されている。昔、神功皇后が茂木に上陸され若菜川にそってのぼり、この地で甑で炊事をされたところから甑岩といい、その香りが下の浦に漂ったところから、飯香浦と呼ぶことになったという言い伝えがある。甑岩神社からは、天気がいいときは橘湾をへだてた雲仙や天草の景色を臨むとともに、眼下に飯香浦、太田尾の町が一望でき、神宮皇后の言い伝えが思い出される。

中央上部の木立に巨石がある

長崎名勝絵図には、「長崎の東、轟川の東に山が連なっている。その頂に甑（こしき）のような形の巌がある。高さ六七丈（じょう）※、周圍廿五六丈、数十里四方のどこからでもよく

見える。航行の船もこれを目標にする。上に小さな孔があって、雲氣が立ちこめ、傍らに臥松が生えている。その松の枝は悉く東飯香浦に向いているので、浦の名はこの甑に因んでつけられた。巌上に神霊があって妄(みだ)りに上ると祟りがあり、発狂して死ぬともいう。故に男は七日、女は廿一日潔斎して初めて、登ることができるとされている。大昔力自慢の神様がいて、二つの岩の一つを飯盛山に下ろし、一つは此処に置いた。又神様が金盤銀盤各一千を自ら作って、巌中に隠している。等々、いろいろの言伝えがある。とにかくこの地方の名物名勝である。巨蛟(みずち)（蛟は龍の一種）が棲んでいて、松の枝に頭をもたげ、口を張って寝そべっている。時には道に出て来たりするが、人には害をしない。皮は松の幹のようで、人が跨いで通っても、身動きもしない。これもまた、唯の大蛇とは違い、神霊のものであろう。このように、ここの巌にまつわる霊異は、今でも間々(まま)耳にすることである。」とある。

※　丈とは、尺貫法の長さの単位で、尺の 10 倍の約 3m。

11 太田尾の大クス

クスノキは、暖地に自生する常緑高木で、日本の樹木では最大の幹回りとなる。クスノキ科の植物は、香りのよい揮発性の精油分を含むものが多いが、クスノキからは樟脳(しょうのう)※を作る。

樹高およそ 20m、胸高幹囲(むねだかみきまわり)5.8m、 地上 2mで三大支幹に分かれ、各支幹の幹囲はおよそ 2.5mである。各支幹から伸びた大小の枝は球状の樹冠をつくり見事である。根元には、ツバキ・ハゼノキが着生し、幹にはオオイタビ・カカツガユ・ノキシノブが着生している。

昭和 53 年 3 月 20 日、市指定天然記念物に指定された。

※　樟脳とは、無色半透明の光沢ある結晶で特異の芳香を持つ。セルロイド・無煙火薬などの製造、防虫剤・防臭剤・医薬などに使用される。

12 丸尾神社

太田尾町にあり、茂木四国八十八ヶ所の第 19 番霊場ともなっている。

ここでは、毎年 7 月 23 日に地蔵まつりが行われている。このまつりに飾られるのが飾りそうめんである。この飾りそうめんは、生で半乾きの腰の強いそうめんを編んで作るものである。ここでつくられる飾りそうめんは、人形(ひとがた)といわれ、紙と木でできた枠に金と銀の紙を各 1 枚はり、 その上に人形を編みこんでいく。 編み上げ工程は約 3 時間、外気を遮断して乾燥しないうちに編み上げなければならない。編み上がったものは宮上(みやあが)りに行列を組んで地蔵堂へ運ぶ。昭和 50 年 6 月 26 日、「太田尾地蔵まつり飾りそうめん」として市指定無形民俗文化財に指定された。

13 成尾地蔵尊

飯香浦町にあり、茂木四国八十八ヶ所の第 20 番霊場ともなっている。

ここでは、毎年7月23日に地蔵まつりが行われている。このまつりに飾られる飾りそうめんの技術は江戸中期頃より開始されたと考えられる。鎧兜(よろいかぶと)一対とその背景の幔幕(まんまく)をそうめんで編み上げるが、幔幕は一本の棒にリリアン編みの様式で編み上げる。鎧兜は木と紙による枠に上下に分けて生そうめんと紙と元結いを使用して編み上げていく。 編み上げ時間はおよそ3時間、太田尾町と同じく生で半乾きの腰の強いそうめんを使うので、外気を遮断して乾燥しないうちに編み上げなければならない。昭和50年6月26日、「飯香浦地蔵まつり飾りそうめん」として市指定無形民俗文化財に指定された。

14 日吉神社

寛永 3(1626)年当時の領主である島原藩主松倉豊後守重政の時に勧請されたが、それ以前は不明である。大山咋命(おおやまくいのみこと)を祀り、滋賀県日吉大社より勧請を受けた神社である。

毎年1月11日に祈願祭、7月29日に願成就祭、9月19日に日吉くんちが行われている。

15 片峰の獅子舞（伝統芸能）

片峰の獅子舞は、部落の平安と五穀豊穣、無病息災を天地自然万物の神々、地区の氏神に祈願するために行われてきた。そのはじまりは定かではないが、江戸時代に旧矢上村から習い伝えられたといわれている。途中約20年間途絶えていたが、平成元年に再興している。

構成は、獅子方2人、玉つき2人、あおい2人、囃子(はやし)方の大太鼓1人、小太鼓2人、鉦方1人、笛吹き多数となっている。

16大山祇(おおやまづみ)神社

寛永3(1626)年、当時の領主である島原藩主松倉豊後守重政の時に勧請されたが、それ以前は不明である。大山積神を祀り、愛媛県今治市の大三島にある大山祇神社の分社である。神社の境内後方の山林の尾根に、約1700年前の弥生中期の竪穴式直径10mの円墳がある。

10月5日のまつりには、五穀豊穣と悪疫退散祈願の奉納踊りとして北浦の俵(とうら)かたげと獅子踊が奉納されてきた。俵かたげは、 庄屋1・帳面方1・チキリ方1・先ぶれ1・幼児及び児童の踊り方50人・囃子方15人

の計 65 人で構成され、ハッピ・前垂れ・手甲(てっこう)・脚絆(きゃはん)・草鞋(わらじ)ばきの姿で俵をかつぎ、円形をつくりながら俵を山と積み上げ、庄屋の検問を受ける場面をユーモラスに表現している。獅子踊りは 17 人で構成され、踊りに使用される鉦(かね)には、享保 3(1718)年の刻銘がある。

昭和 50 年 12 月 5 日、「北浦の俵かたげ及び獅子踊」として市指定無形民俗文化財に指定された。

17 茂木植物化石層

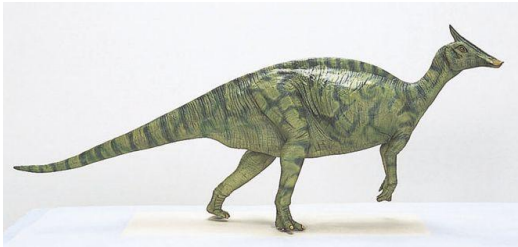
茂木町の片町から北浦町の白浜海岸に露出する地層で、露頭の下部の、厚さ 1.5m の泥岩の層に植物化石を含んでいる。植物化石は 31 科 40 属 52 種が識別されているが、その大部分は双子葉類で、ブナ・イヌザクラ・フウ・ケヤキなどである。植物化石から推定されるこの地層は、1000 万年前の新生代第三紀鮮新世末、と考えられている。

明治 12(1879)年、10 月スウェーデンの探検船ベガ号が北極海航路の開拓に成功した後長崎に寄航し、隊長のノルデンショルドが茂木の植物化石を採集し本国に持ち帰った。これを古生物学者ナトホルストが研究し発表したが、これが日本の新生代植物化石の最初の記録となった。

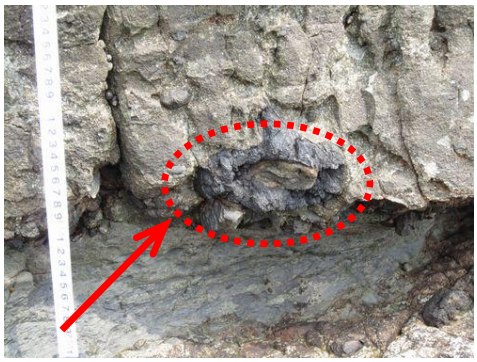
昭和 54 年 7 月 27 日に県指定天然記念物に指定された。

また、平成 23 年 4 月には、約 8400 万年前の恐竜の化石と思われるものが北浦海岸の白亜紀後期の地層（おそらく三ツ瀬層に相当）から発掘された。平成 24 年 3 月には、発掘された化石が鳥脚類の右大腿骨上半部であり、ハドロサウルス科に属する可能性が高いことが判明した。大きさから全長 6m程度の恐竜のものと考えられている。

北浦産出の恐竜化石：左から前方、外側方、後方。
画像提供：福井県立恐竜博物館

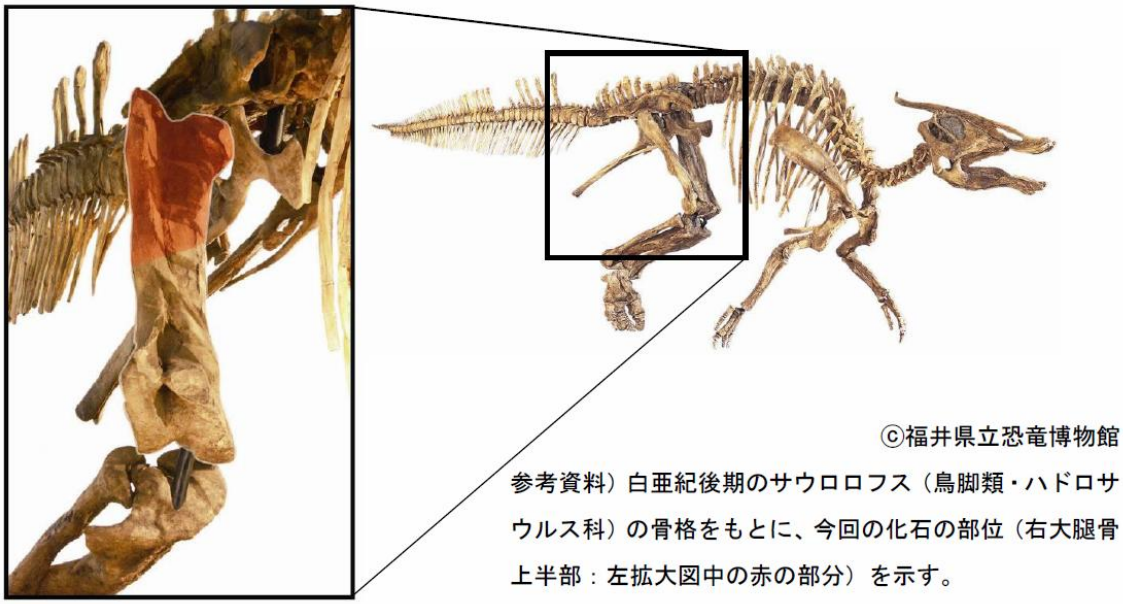


サウロロフスの模型
画像提供：福井県立恐竜博物館／模型製作：荒木一成



画像提供：福井県立恐竜博物館

掘り出される前の写真。矢印の先に化石の一部が見えている。



ⓒ福井県立恐竜博物館

参考資料）白亜紀後期のサウロロフス（鳥脚類・ハドロサウルス科）の骨格をもとに、今回の化石の部位（右大腿骨上半部：左拡大図中の赤の部分）を示す。

18 伊都岐島神社（弁天社）

市杵島比売命（いつくしまひめのみこと）を祀る。裳着神社創建の地で、古老の口伝によると、「今から約 800 年前は、海辺で乞食・浮浪者が社殿を荒らし、神体までも粗末にすることがあったので、時の有力者が辻の森が鎮座地として適地であるとして、末社の伊都岐島神社（弁天社）のみ残して移された」と伝えられている。毎年 10 月に秋まつりが行われている。

なお、現在の石の鳥居の額には、厳島神社とある。

19 石の御前（大山祇神社）

片町の旧茂木街道の近くにあり、長崎名勝絵図には、「田上から茂木村にゆく道の傍らにある。祠に祀るのは、茂木を開いた、女体の神というから、神功皇后である。近くに巨石が立っている。かもじ掛の石という。鳥居は道の側に立つ。」とある。

現在は幼稚園の用地として造成され、その片隅に巨石の一部と神社が移し、祀られている。

幼稚園の上手の森の中に、奥の院御前様石祠があり、ここに 1500 年前の古墳がある。

毎年 11 月はじめに石の御前祭が行われている。

20裳着神社

応神天皇、その父仲哀天皇、母神功皇后の三君主と、その当時の豪族家臣であった武内宿祢大臣、大伴武持大連、物部胆咋連、中臣烏賊津連、大三輪大友主君の五臣が祭られており、明治維新までは「八武者大権現」と言われていた。

昔、神功皇后三韓出兵の途次、この浦に上陸され、御衣の裳を着けられたことで裳着の地名が起こったという。その後、当社を創建された。

長崎名勝絵図には、「茂木村の口にある。土地の人が1年の折々に祭礼をする。石の鳥居の額にある八武者權現の文字は、龍造寺隆信の筆になる。八武者というのは、神功皇后三韓征伐に随従した、八人の家臣であると、古老は言っている。いつの時代に、この社が祭られるようになったかは、古いことで判らない。託摩近江という者が、家代々稱を同じくして、祀事を奉ずること、既に開祖から三十五世。然し社記旧記が失われているので、詳しいことは全く判らない。」とある。

天正7(1579)年、領主大村純忠が茂木村を長崎村とともにイエズス会に寄進した。この教会領の時、キリシタンのため社殿を焼かれ、一時廃絶した。天正 15(1587)年豊臣秀吉が教会より没収した。その後、島原領となり、寛永3(1626)年藩主松倉豊後守重政の時、再興された。松倉氏の後、島原藩主となった高力氏の2代目高力隆長は、八武者大権現の社号を改定し八幡宮と称したが、当時茂木村は凶作が続き住民糊口に苦しみ、神慮に応ぜざる行為として社号を旧に戻したと伝う。

明治維新に際し、神仏判然令と同時に出された布達に沿って、慶応4年(1868)年4月裳着神社と改称した。茂木本郷の総社（氏神）で、明治7(1874)年村社となった。

なお、最初は弁天山にあったが、約800年前に、末社の伊都岐島神社（弁天社）のみを残して、海辺の弁天山から現在地に移されている。

本殿は権現造りで　本殿四方の欄間に牡丹・雲龍・鯉・金鶏・亀などの籠彫りの精巧な彫刻がある。この彫刻は明治8(1875)年の本殿造営に際し、江戸時代の旧前の建物より移築されたものである。

篭彫り彫刻

毎年2月3日に節分祭並びに春まつり、7月第4土曜日には祇園まつりが行われる。当日は午後3時から遷御祭、午後4時に御神輿渡御の行列が出発する。渡御には、その年の当番神事町が供奉し、祇園神輿が氏子地区平安清祓のため町内を巡幸する。午後7時頃から、夕涼みの親子連れなど、参拝者が多くなる。

8月1日には夏越まつりが行われる。このまつりは、当日午後4時より、神社での祭典の後、神職・総代が、神籬を先頭にして、氏子が納めた人形、夏越の大幟、社名旗などを持ち、太鼓を打ち鳴らしながら茂木港桟橋まで行列し、前後方に夏越大祓人形流しの大幟、白赤紫の社名旗を吹き流しを飾り立てた御座船で、太鼓を打ち鳴らして港を出港し、港口の龍王岩より遥か沖合まで行き、青竹筒に入れた御神酒と小鯛を懸け下げ、人形を包んだ薦に石のおもりをつけ、祈願して海底深く鎮めるといった神事が行われる。

10月18、19日前後の土・日曜日には、くんち（茂木くんち）が行われている。このまつりの神事当番町は、昔から農業地区の片町と南川・河内の二組で隔年ごとに行われていたが、昭和

54 年から漁業地区の橋口・中・寺下・新田が当番町に加わることとなった。まつりの当日は、午後 1 時に遷御祭、午後 2 時発御（お下り）、神輿は神社から茂木海岸の御旅所まで渡御する。午後 3 時から御旅所御着祭が行われる。夜は前夜祭が行われる。翌日は、午前 10 時から例大祭、午後 2 時から湯立神事、発御祭、午後 3 時より御旅所発御（お上り）となる。前日と逆の道筋で神社まで約 1 時間の巡幸が行われ、午後 5 時から遷御祭が行われる。社伝では、現在のこのまつりは、元禄 8(1695)年第 4 代神主詫麻近江守藤原清久の時、茂木郷の邑主森傳内と再興したものである。

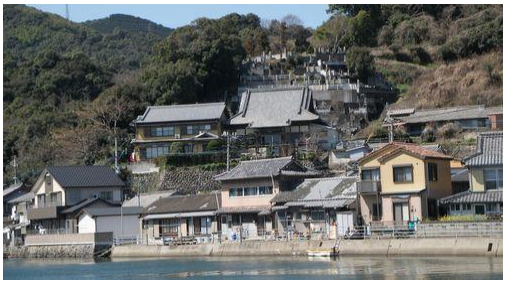
昭和 30 年代の茂木くんち

また、茂木の町に大きな夫婦銀杏の木がある。この 2 本は大きさが同じくらいで、樹齢も同じくらいと推定されている。町の人はこれを「お宮の銀杏は雄銀杏、お寺の銀杏は雌銀杏」と呼んでいる。お宮とは、裳着神社のことで、お寺とは玉台寺のことである。裳着神社（八武者大権現）、玉台寺ともに寛永 3(1626)年に再興・開山されている。

21 感応山円成寺

明治 11(1878)年 5 月 28 日、長崎市伊良林長照寺境内の円成坊の移転による教説所新設願が許可される。同年 11 月 25 日、遷院改称願の許可を得、感応山円成寺を公称し、長照寺の末寺上席となる。

明治 14(1881)年、柴田俊道が開山した日蓮宗の寺院。



22 水神神社八大龍王水神祭（川祭り）

6 月の中旬になると弁天橋の近くの若菜川に青竹が立てられている。祭礼事典長崎県に「当日早朝より、当番の男性の氏子が集合し、青竹を組んで祭壇を作ったり、丈余の幟を立てるなど祭典の準備をする。準備が終ると、当番役がドラを鳴らして町内に触れ回る。すると各家から氏子たちが家内安全の青笹旗を持って集まり、青笹旗は祭壇の下に奉納する。青竹で作られた祭壇の四本柱には、白酒が入った青竹筒と小魚を懸け下げ、竹棚の上に神酒・シトギ団子・野菜・果物（山桃）・赤飯をお供えして神事が始められる。神事は町の水害除け、人の水難除けを祈願して行われ、祝詞奏上の後、当番の氏子 15 人が参拝する。終了後、頭屋の家に移動して直会がある。」と記載されている。以前は、茂木の 4 つの漁業部落である橋口、中、寺下、新田が行ってきたが、現在では橋口の漁業者がその伝統を伝えている。

平成元年撮影

23 ペーロンと龍王神社樽納め神事

約 300 年前から続く伝統行事で、漁業部落の橋口、中、寺下、新田の 4 部落が部落対抗で競技を行い、結果如何によってその年の豊作豊漁を占う行事として行われてきた。

毎年 6 月の第一日曜日に行われている。当日は午前 7 時に氏神である裳着神社へペーロン競争の安全祈願に朝詣り。道中ドラを鳴らして町内へペーロンの行事を知らせる。ペーロンに先立ち、

龍王神社樽納め神事が行われる。

当番町の子供ペーロン舟（ヒヨコさん舟）二隻に3歳から6歳の男児が、半纏（はんてん）・鉢巻きの出で立ちで小さな櫂（かい）を持ち、親たちに抱かれドラ・太鼓に合わせて舟を漕ぎ、競い合いをしながら龍王岩まで行く。神主は龍王神社の御幣・注連縄・青笹竹を新しく取り替えた後、沖合に行き青竹筒の神酒と小鯛を石のおもりに懸け下げ海中に鎮め、朱のシメ樽の神酒を海原に注ぎ、大海の海神に海上安全・大漁豊漁の祈願を行う。いつ頃かはっきりしないが、ペーロン舟を使ったヒヨコさん舟はなくなっている。この神事の後、4部落の漁業青年の勇壮な茂木ペーロン競争が開始されていた。

丁度この頃、農家では枇杷の最盛期で、農家も麦わらをタデ舟用に出し合って応援するなど盛大なものだった。

近年では実施時期は一定ではなく5月～6月に実施し、平成22年からは4ケ町の廻り当番制に代わり、茂木漁協青壮年部が主体となって実施している。

ドラを鳴らして町内廻り

平成元年　ヒヨコサン舟

平成元年　ペーロン

24 松尾山玉台寺

元和2(1616)年、宝誉上人、寺地を中心として、念仏弘通す。

元和7(1621)年3月11日、松尾山玉台寺の称号を許され、寛永3(1626)年1月15日、現在地に松尾山無量院玉台寺を開山した。本尊仏は、阿弥陀如来の木製坐像で、浄土宗寺院である。

寛政4(1792)年島原半島の眉山が、2回の火山性地震のため大きく崩壊した。この崩壊した大量の土砂が海に流れ込み有明海に大津波を発生させ、島原側と熊本側合わせて死者約1万5千人という大災害を引き起こした（島原大変肥後迷惑）。寺内には、このときに漂着した死者を埋葬した塔がある。塔の傍には俗に「三官さんの墓」と言われる唐人の墓がある。

島原大変肥後迷惑で、漂着した死者を埋葬した塔

境内には、2段の花崗岩の石材の上に高さ約3mの自然石の大きな長尾安右衛門尉殿墓がある。長尾安右衛

長尾安右衛門尉殿墓

門尉は、寛永 14(1637)年起こった島原の乱後の復興のために、島原藩主として移封された高力摂津守忠房の命により、当時島原領であった茂木地方のキリシタン撲滅に功績をあげた。安右衛門尉の死にあたり摂津守は、労をねぎらい墓を壮大にして威を示した。

また、本堂前の銀杏(いちょう)の下に草積御前の祠がある。長崎名勝図絵には、寺の右側に移し祭った、近年（本書は昭和 6 年発行）その祠が焼けたので、今度は寺の内に立てたとある。

25 潮見崎観音堂

松月庵と称し、宝永 3(1706)年 7 月開山。

十一面観世音菩薩を祀り子育て・子授けの観音として信仰されている。観音像は、奈良時代の高僧行基ゆかりの 7 つの観音像の一つといわれている。8 月 10 日には千日祭が行われ、この日にお参りすれば千日参ったと同じくらいの御利益があるといわれ、賑わっている。

ここにある月見台は、かつて灯りを立てて灯台の代わりとして、使われていたといわれており、長崎名勝図絵には、「潮見崎の上にある。或いは注連(しめ)が崎というのは、日の出、月の出の時に、波浪の起こるのが、注連縄を引きわたしたようであるからである。月は赤井が崎の上から出て、その光が海に映じ、しめが崎月見台の下にかけて、布を引いたようになるから、布引の月という。誠に美観である。ここの朝日の出もまたすばらしい、山際や雲の縁が、朱をさしたるが如く、火の燃ゆるが如くで、画家が絵の具で彩色したようである。」とある。

26 竈神社（かまどじんじゃ）

寛永 3(1626)年、当時の領主である島原藩主松倉豊後守重政の時に勧請されたが、それ以前は不明である。奥津彦命(おきつひこのみこと)と奥津姫命(おきつひめのみこと)の火の神を祀る。

階段を登った本殿の前の左右に海の小石が積まれている。これは、元日にひしゃくで海から若潮をくみ、白い石英の玉石を 3 つ入れ、潮玉として神社に奉納されたものである。

毎年 3 月 9 日頃春まつり、9 月 29 日にくんちが行われている。

この神社の境内には昭和 48 年 7 月 27 日に市指定天然記念物に指定された大クスがある。この大クスは、樹高約 25m、地上 50ｃｍの幹囲 10.5ｍで、枝は東西へ 40m、南北

市指定天然記念物の大クス

へ 37m伸びている。樹齢は 350 年以上と伝えられている。

27 山ン神（大山祇神社）

宮摺町にあるこの社業（しゃそう）は、昭和 54 年 5 月 10 日に「宮摺山ン神の社業」として市指定天然記念物に指定されている。

説明文によると、山ン神とは文字通り山を守り、山をつかさどる神で、祭神は大山積神（おおやまつみのかみ）である。幅 12m、延長 40mほどの小さい社業に、スダジイ・ヤマモモ・タブノキ・モッコクの大小を中心に、ハマビワ・サザンカ・ツバキ・シロダイ・ヤマビワなど 30 種をこえる自然林が繁っている。土地の人たちは、社業の樹木の一つ一つに神霊が宿るとして、大切にしてきたものという。

毎年 11 月 15 日頃、山ン神まつりが行われている。

28 加茂神社

寛永 3(1626)年、当時の領主である島原藩主松倉豊後守重政の時に勧請されたが、それ以前は不明である。別雷神（わけいかづちのかみ）を祀り、総本社は、城州加茂社（京都の賀茂神社）。

明治維新前は加茂大明神と称していたが、慶応 4(1868)年 4 月賀茂神社と改められた。

毎年 2 月 15 日に春まつり、7 月 15 日に川まつり、10 月 14・15 日にくんち、11 月 16 日に山の神まつりが行われている。

29 草積御前

長崎名勝図絵に、「茂木村草積野にある。夫人は肥前国主龍造寺隆信の女（むすめ）で、島原の漁夫の娘に生ませたものであるが、隆信は自分の子であることを知らなかった。母が死んでからは、寄る辺ない身となり、流落してここまで来た。そして失明していたので、道に迷っているところへ、犬が吠えかかり噛みつこうとした。杖で追い払おうとしたが駄目で、石を手探りでつかみ、これを投げ、遂に悶絶して倒れた。里人が憐れに思い、介抱したが叶わず、遂に死んだ。それで葬ってやったが、その後不思議なことが起こるので、改めて祠を立て、草積明神として祀った。願いをかけると、必ず叶えられた。賽銭の代わりに小石を上げるので、祠の傍には小石が堆積している。延宝 3(1675)年唐通事劉宣義が、財を募って修復した。夫人は最初千々村に流れついた。そこには漁師の家が 3 軒あって、そこで介抱され、死ぬまぎわに、私が死んだら、海の見える高い山に葬って、五輪の塔を立てて下さいと言ったので、千々と大崎の間の松の大木のある所に埋葬した…」とある。

草積御前は、県道 34 号線の大崎町と千々町の集落の間にある南小中学校への道路沿いにあり、茂木四国八十八ヶ所の 55 番霊場ともなっている。また、参詣する人が多かったが、当時の千々は道路が未整備で不便だったため、分骨して玉台寺にも祀っている。

草積御前の横にある説明には、「藤原俊成の子隆信（定家の兄）が島原を訪れたとき漁師の娘との間に一女を設けたが不運にも盲目となり船より落ち茂木の千々海岸に漂着したが、上陸後野犬にかまれ死去、臨終に村人に言う『私は盲目で不幸な生を終ろが、同様な運命の人たちを死後救いたい。』と千々の村人は現在の位置に葬り冥福を祈った。草積みした野で死去したので草積御前と称した。」と記している。

龍造寺隆信（1529 年－1584 年）は、戦国時代から安土桃山時代にかけての肥前の戦国大名であり、藤原隆信（1142 年－1205 年）は、平安時代末期から鎌倉時代初期の貴族である。

30 塩釜神社

寛永 3(1626)年、当時の領主である島原藩主松倉豊後守重政の時に勧請されたが、それ以前は不明である。塩土老翁神（しおつちのおじのかみ）を祀り、宮城県塩釜系の神である。

10 月 11 日～12 日（前後することがある）には、千々くんちが行われている。

31 千々の二つ岳

長崎名勝絵図には、「千々海中にある。二つの島が並び対してそば立っている。上に松の木がある。往来の船は、この二峰の間を出入する。茂木の立岩に比べると、また変わった眺めである。」とある。

地元には、昔天草と川原の大蛇がけんかして、川原の石が黒いのは大蛇の血で染まったからだといい、天草の大蛇は二つ岳から天に昇って帰った。さらに、二つ岳を海側から見ると岩の層が血の跡がついたようになっているのは、この時ついたものだという言い伝えがある。

32 千々弥生式土器の遺跡

昔、この一帯は砂地の松林であったが、運動場を作るとき、多数の黒曜石（こくようせき）の矢じりや人骨が出ていたことから、昭和 46 年 7 月、千々町の弁天社の境内で発掘調査が行われ、石器・矢じりの外、3,500 年前の土器・カメ棺等が出土した。ただし、人骨は江戸時代のものと判明した。

写真中央が弁天社で、コンクリートを打っている部分及び周辺から出土した。